君を探して

舞湖　早紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君を探して

【Ｎコード】
Ｎ５５５９Ｘ

【作者名】
舞湖　早紀

【あらすじ】
ついに黒の組織を壊滅させ、灰原が作った解毒薬によって元の姿に戻った新一。ぎりぎり留年をまぬがれた新一は、普通の学校生活を送る。ーはずだった。なのに、彼はある日事件の帰りに交通事故にあってしまう。
病院で目を覚ました彼は、記憶を失い、下半身も動かなくなってしまう。それは、命の代償としては重すぎるものだった。
一生車いすの生活を送ることになってしまった彼は、母の有希子と父の優作によって誰にも内緒でロスに連れて行かれる。

―２年後。未だに新一を探していた蘭は、大学の留学先であるロスで車いすに乗った新一を見つける。すぐ隣にある大学に彼が通っていることを知り、彼の家を探し当てる。そこにいた有希子に、蘭は衝撃の事実を伝えられる――

1～いつもの日常

ついに、新一はＦＢＩの助けもあり黒の組織を壊滅させた。
その後ＡＰＴＸ（アポトキシン）４８６９のデータも見つかり、灰原に作ってもらった解毒剤により元の体に戻る。
そうしてぎりぎり留年を防ぎ、無事高校３年生に進学した新一であったが、先生から授業中に事件に行かないという条件があったため今は普通に学校生活を過ごしている。

そんな夏のある日である一。

＃～～～＃

「相変わらず暑っちいなー夏は。」
だらだら汗をかいている新一が言った。

今日は真夏の猛暑日。
気温は３５度を超えており、道にはほとんど人がいない。
きっと皆家でクーラーの効いた部屋で涼んでいるのだろう。
太陽に向かって咲くひまわりがまぶしく見えるほどだ。

「そうだね。早く家に帰りたい！」
隣にいるのは蘭。

ちょうど二人で学校から帰っているところだった。

「じゃあ、また後でな！」
「うん。また後で！」

そう言って二人は別れる。
実は、蘭がこの前新一に告白の返事をして、めでたく二人はカップルとなった。
といっても、そんなにカップルっぽくないのだが・・・・

別れてから足早に家に向かった新一は、いきなりびっくりすることとなる。

彼が「ただいま。」と言ってドアを開ける。
すると・・・・

「お帰り、新ちゃん！」
いきなり母の有希子が抱きついてきた。
「げっ！・・・てゆうかなんでいるんだよ！？」
「何、げっ！って。私の家であるこの家にいちゃだめなの？」

有希子は鋭く新一をにらむ。
「べ、別にそういうわけじゃ・・・・」
「冗談よ冗談！そういえば、新ちゃん蘭ちゃんと両思いになったそうじゃないの。よかったわね！」
「・・・まぁ。」
にっこり有希子がほほえむ。
「何よ～今日はやけに素直じゃない。だって・・・・」

その時ー

ブルルルルル

新一の携帯が鳴った。

「あ、ちょっと悪ぃ・・・・もしもし。」
『おー工藤君。もう学校は終わったかね？』
目暮警部からだった。
一応警察も事情を知っているので、少し電話をかけるのをためらったようだ。
「はい。もしかして、事件ですか？」
『その通りなんだ。今から来てくれるか？』
「わかりました。場所はどこですか？」
『杯戸町１丁目の１の３５だ。』
「では、今から向かいます。」

そう言って電話を切った。

「新ちゃん、事件なの？」
怪訝そうに有希子が聞く。
「あぁ。今から行ってくる・・・・・ってヤベ！！今日は蘭とでか

ける約束してたんだった。ことわらねぇと・・・・」

そして、もう一度携帯を開き、電話をかける。

～一方、蘭の家ではー

「あれ、電話だ。」

まだ制服を着替えてなかった蘭は、そのまま携帯をとる。

【着信・工藤新一】

「もしもし、どうしたの？」

『実は、事件が入って・・・・』

「また事件？この前もそうだったじゃない。」

不機嫌になる蘭。

『悪ぃ、だけどどうしても・・・・』

「わかったわよ。だけど、気をつけて行ってきてね？平成のホームズさん。」

『悪ぃ。じゃ』

彼は電話を切った。

「ふぅ・・・・」

蘭はため息をつく。

いつもこうだ。

今度こそはと思うと、必ずその日に事件に新一が呼ばれる。

でも、今日だけは嫌な予感がした。

そう。１年くらい前に１度彼がいなくなったときのように。
結局、彼は何があったのか話してくれなかった。
いつもはぐらかされて。

ーその予感は、ついに的中してしまうのである。

そして、工藤新一は日本から姿を消す。

1～いつもの日常（後書き）

こんにちは！
舞湖早紀です。
とりあえず、この作品が2作目となります。
たぶんこの話はだらだらと続くと思うので、最後までおつきあいお願いします。

2～突然やってきた不幸（前書き）

すみません！
またまた更新が遅くなりました・・・・
あと、一つお詫びしなければいけないことがあります。
実は諸事情あって、2週間ほど更新することができません！
なので、次回の更新は再来週になってしまうと思います・・・・
本当にすみませんm（__）m

2～突然やってきた不幸

ここは杯戸町の事件現場。

「いや～今回も君の力を借りてしまったな！」
そう言いながら、目暮警部は新一の背中をばしばしたたく。
「いえいえ、難事件ならこの工藤新一にお任せを！」
痛そうに背中をさすりながらも、新一は笑顔で答える。
「とりあえず事件は解決したし、もう9時だから君は帰るかね？」
「え！？あ、ほんとだ・・・・ではお言葉に甘えて、今日はこれで失礼します。」
今回も事件に没頭していたため、時間が過ぎていることに新一は気

づかなかったようだ。
窓の外を見てみると、真っ黒な空に星がきれいに光っていた。
そのまま帰ろうとした新一を、慌てて目暮警部は引き留める。
「あ、なんだったら車で送るが・・・・」
「いえ、結構です。結構今回も近いので・・・・では、これで失礼します。」
笑顔で颯爽と出て行った彼を、警察の方々達は呆然とみていた・・・・

一方新一は。

（また事件で遅くなっちまったな・・・・早く蘭に会いたい・・・・

）
そう。さっき警部の厚意を遠慮したのも、急いで出てきたのもこのためだった。
（ちょっと急がねぇと。）
真っ暗で街灯も少ない夜道を、彼は一人で急ぐ。

でも、このとき急がなければよかった。
あそこで渡ろうとしなければよかった。

この後する後悔は計り知れない量となる。

いろんな偶然が重なって起こってしまった事実が、新一を苦しめる・・・・

行きの道を覚えていなかった新一は、勘だけで道を進んでいく。
（ん？たぶんここら辺で曲がって・・・・）
焦っていた彼はどんどんスピードを上げていく。
（あ！駅の電気だ！）
そう思って信号も横断歩道もない道路を彼が横切ろうとした。

その時ーーーーーー！！！！！！！

「危なぁぁぁぁぁぁぁい！！！！！！！」
誰かが叫んだ。
それにつられるように新一は横を向くーーーーーーーー

その時にはもう遅かった・・・・・・・・

キキィィィィィ！

ドンッ

あたりに鈍い音が響き渡る。

それと同時に、新一の体が数メートル先まで吹っ飛ばされる。

吹っ飛ばされた新一はーー

まだかろうじて意識はあった。
しかし、もう何も彼の耳には届いていない・・・・

血まみれの自分を見て彼は状況をすぐに理解した。
（俺・・・・・死ぬのか・・・・？・・・・・・ごめんな、・・・・

・・ら・・・・・ん・・・・・）

そこで彼の意識は途切れてしまうーーー

そんな中で、遠くでサイレンの音が鳴っていた・・・・・・

＃～～＃

その頃工藤家では。

「久しぶりねーこの家に戻ってくるのも。」
我が家の書斎を見ながら、有希子はほっとする。
「そうだな。」
本を読みながら、優作もくつろいでいた。

でも、そんなひとときもつかの間だった。

「久しぶりに家族全員でどこかに行きましょうね！」
「いいが、新一はどうするんだ？事件とか学校とかあるだろうし。」
「それは・・・・」

その時。
有希子の話を遮るように電話が鳴った。

RRRRRRRR

「あ、電話だわ」
何気なく有希子は受話器を取る。

「もしもし、工藤です。」
『あ、工藤新一君のお宅ですか？』
相手の声は緊迫していた。
嫌な予感がする。
そう思いながら、普通を装って返事をする。
「はい、私は新一の母ですけど、どうかされました？」
『実は彼、交通事故にあったんです！とてもひどい大けがで・・・・・』
「・・・・え？」
有希子の顔色が一気に青ざめてゆく。
『今、緊急手術中なんです！早く、杯戸中央病院に来て下さい！！』
そこで電話は切れた。
受話器を持ったまま固まってしまった有希子に、優作が声をかける。
「どうした？」
「あ、あのね、し、新ちゃんが交通事故にあったって・・・・・今、

杯戸中央病院で緊急手術中・・・・・・う、うわぁぁぁぁぁ」

そこまで話したところで、有希子は号泣しだした。

そんな彼女を、優作は受け止めている。

でも、少なからず彼も動揺していた。

「とりあえず、病院に早く行こう。話はそれからだ・・・・」

そして優作は、泣き続ける妻を乗せて病院へと車を急がせた・・・・

#〜〜#

杯戸中央病院では。

車を駐車場に止め、二人はいわれた手術室へと案内してもらう。

やっとついたが、まだだった。

《手術中》

このランプは、まだ赤々とついている。

その近くにあったソファーで有希子は眠ってしまったが、彼はずっと起きていた。

息子が無事助かることを祈ってーー

―5時間後。

ようやくランプが消え、酸素マスクをつけた新一が運ばれてくる。

有希子もその音に気づいたのか、目を覚ましていた。

「新一は、新一はどうなるんですか?!」

つかみかかるように聞く彼女を、優作はなだめている。

「無事助かりました。数時間たてば、意識も取り戻すでしょう。しかし・・・・」

「しかし・・・・?」

「・・・彼には障害が残る可能性が高いんです・・・・」

「な・・・・ん・・・・の?」

シーンと静まりかえった病院では、やけに大きくその言葉が聞こえた。

「頚椎損傷による下半身不随です・・・・」

新一の体に残された、命が助かるための代償は、あまりにも大きすぎた・・・・・・

2～突然やってきた不幸（後書き）

なんか今回はやけに長いです・・・・・
あ、ちなみに下半身麻痺といっても、別に胸から下全部が動か・・・・・
あわわわわ（汗）
次回のネタバレするところでした・・・・
あと、もう一つの小説も、しばらく更新できません！！
ここの場でお詫び申し上げます・・・・

引き続き感想やアドバイスなどお待ちしております！
これからもよろしくお願いします！

3～記憶喪失

「下半身不随って・・・・・」
呆然と立ち尽くしている有希子の代わりに、優作が聞く。
「詳しくは、診療室でお話ししますんで、こちらに来て下さい・・・・・」
申し訳なさそうな医師に連れられて、二人は診療室へと向かった・・・・

＃～～＃

「頚椎損傷による下半身不随とは、脳のここの部分を損傷することによって起こります。それによって、通常は下半身、すなわち胸から下全体が動かなくなります。・・・・が、」
「が？」
「彼の場合は運がよかったのか、動かなくなるのが太ももとそこから下だけなのです。」
驚いた有希子は、少し希望を持って医師に聞いてみる。
「つまり、車いすさえあれば、普通の生活はできるって事ですか？」
「そうなりますね。ですが、危険も多いので、最初のうちは息子さんについてあげて下さい。」
そう言われて、二人は固まる。

「わ、わかりました・・・・」
たどたどしい返事をしながら、二人は新一の病室へと向かった・・・・

＃～～＃

新一の病室に行った二人は、ただただため息をついていた。
「やっぱり、新ちゃんをロスに連れて行くしかないのかな・・・・」
「だろうな・・・・・」
有希子も優作も、今まで新一をほったらかしにしていたことを後悔

していた。

何を思ったのか、有希子が新一のすぐそばにいすを持って行き、新一の顔を見つめていた。

気がつけば、カーテンの隙間から光が差し、病室は明るく照らされていた。

「こんな平気な顔してるのに、起きたらこのつらい真実を受け止められるかしらね・・・・」

そう言って、彼女は新一の顔をなでる。

「うっ・・・・」

知らず知らずのうちに涙があふれ、新一のほおをぬらしてゆく。

その時だったーー

「ん・・・・」

新一がわずかに瞬きをし、目を開けていく。

「新一！！」

二人は駆け寄り、うれしそうな顔をする。

一瞬雰囲気が和んだが、それもこの言葉を聞くまでだった。

「ココはドコ？あなたたちダレ？」

「え・・・・・・」

そう。

新一は事故によって、足の自由とともに記憶も失っていた・・・・・

・・・・・

#〜〜#

蘭side

ピンポーン

チャイムの音が響く。

ピンポンピンポンピンポンピンポーン

「ちょっと新一！？早くしないと遅れるわよ！」
事故のことを全く知らない私は、いつも通り新一の家に迎えに行っていた。
（もぉー、昨日の約束また断るわ家から出てこないわどうゆうつもりよ！もう新一なんか知らない！）
怒りながら、私はいつも通り学校に向かう。

途中で、大親友の園子ともあった。
「どうしたのよ、旦那と一緒じゃないなんて。」
「何回チャイムを鳴らしても出てこないの！」
ぶっきらぼうに答える。
「もしかしたら、事件で呼び出されたんじゃない？」
「・・・・そっか。かもね。」
急におとなしくなった私に、園子が声をかける。
「もしかして、昨日なんかあった？」
「ううん、何でもない。」

見上げた空には、少し雲がかかっていた。

私の心の中にある不安を表すように、どんどん空を覆っていく。

また、会えなくなる気がした。

それも、前よりずっと長く。

まさかその時は、その不安が当たってしまうとは思わなかった・・・・・・・

3～記憶喪失（後書き）

更新が遅くなりすみません・・・
本当に文章力無いですよね、私（T－T）

また、たくさんの感想ありがとうございます！

これからもよろしくお願いします！

4～決断

「やはり、記憶喪失ですね・・・・」
重々しげに医師が伝える中、有希子が聞く。
「記憶が戻る可能性はあるんですか？」
「何ともいえません・・・・ただし、彼の場合はひどくダメージを受けているので。ほんとは、生きているのさえ奇跡なんですよ・・・・」
その言葉を聞いた二人は、もう決心するしかなくなった。
「先生、私たち新一が退院したら、ロスに連れて行きます。」
「え？あの体で・・・・」
「今まで、日本に住む新一が中学生になってから仕事のため二人でずっとロスに住んでいたんです。会うのは年に三回くらいで・・・・」
医師も目を見開く。
「だから障害があり、そして記憶喪失にさせてしまった以上、もう

心配で一人になんかできません！」
「・・・そういう事情があったんですね。では、あと一週間で彼を退院させましょう。」
「ありがとうございます。それでは、心配なので新一のところに行ってきます・・・」
きっぱり言った有希子は、優作を連れて新一の病室へと向かった・・・

＃～～＃

新一ｓｉｄｅ

ここはドコ。

僕は誰。

あの二人の人は誰。

どうして僕はここにいるの。

何もかも思い出せない。

それが、こんなにも苦しいことだとは思わなかった。

考えても、考えても頭が痛くなるだけ。

窓からはまぶしい光が差し込んでいた。

近くに行きたくて体を動かしてみても、痛すぎて何もできない。

ガラッ

そこで、さっきの二人が入ってきた。
とても深刻そうな顔で、こっちにやってくる。

女の人がしゃべり出す。
「あなたの名前は工藤新一。ごく普通の高校3年生よ。」
僕の名前は工藤新一ー・・・
「そして、私たちはあなたの両親。私は工藤有希子。こっちは工藤優作よ。」
僕の両親だったんだ。
「あなたは私たちが仕事でロスに行っている間、一人で日本で暮らしていたわ。」
つまり、ずっと一人暮らしだったってことか。
「でも、運悪くあなたは私たちが日本に来ているときに交通事故にあって、ここにいるの。」
そういうことだったのか。

でも何か引っかかる。
何だろう。
「あの、いったい僕の体はどうなっているんですか?体中痛くて・・・」
とりあえず質問してみる。
「・・・っ新ちゃんの足はね、もう一生動かないの。」
「え・・・・?」
「先生はリハビリ次第だって行ってたけど、多分これからずっと車いす生活・・・」
嘘だ。
嘘だぁぁぁぁぁ!

いきなり目が覚めて。
何も覚えて無くて。
気がついたら車いす生活？

そんな・・・・
そんなの嫌だ！

真っ青になっている僕を見たのか、有希子さんは僕に声をかける。
「だから、一緒にロスで暮らしましょ？ちなみに、敬語じゃなくていいから。」
「うん・・・母さ・・・ん」
「それでいいのよ！じゃあ、一週間後に退院できるから、楽しみにしててね。」
そう言って、母さんは病室を出て行った。

僕自身は全然楽しみじゃないのに。

ふと思いつき、足を動かそうとしてみる。

ーだめだった。もう、自分の意思でな動かせないと身にしみて思った。

そんなことを考えているうちに、いつの間にか意識を失っていた。

そして、深い深い眠りへと落ちていく・・・・

４～決断（後書き）

本当に文章力無いですよね（Ｔ－Ｔ）

ところで、最近アクセス数を調べてみました。
すると、な、なんと・・・・・
３０００アクセスを超えていました！
これも皆様のおかげです！

というわけで、これからもよろしくお願いします？

5～記憶の欠片（前書き）

今回は全部新一視点です！

5～記憶の欠片

気がつけば、辺り一面は真っ白。

自分以外には、一人の女性の天使以外いない。

その天使は、純白の翼を持ち、白い服に身を包み、絶世の美女といっていいほどの美人だった。

静かにその天使が僕に話しかける。

「あなたは工藤新一君ですね？」

「は、はい・・・」

その天使がほほえむ。

「私はここで困った人々をお助けする天使。あなたの望みは何？」

「えー・・・と・・・」

困っているのを見たのか、天使が僕の考えていることを見透かす。

「もしかして、あなた記憶が無いの？だったら、前のあなたの記憶を少しだけ見せてあげる。」

「本当に？！」

「えぇ。それじゃ、行くわよ。それっ！」

軽やかな天使のかけ声を聞いたとたん、たくさんの映像が映し出される。

まず、一つ目。

どこかの学校に、僕によく似た人と一人の女の子が入っていく。

その子は、髪の毛は真っ黒なストレートで、スタイルもよく、かわいい女の子だった。

『ねえ新一～早くしないと遅刻しちゃうよ！』

『わーってるって！そんなに急ぐなよ蘭。』

『今日も熱々だね～お二人さん。』
『っ、園子！』

新一？
蘭？
園子？

何が何だかわからない。
でも、少しだけ懐かしい感じがする。
それは、気のせいか？

そして映像は二つ目に変わっていく。
次に二つ目。
また、僕に似た人とさっきの女の子が映っている。
でも、今回は私服だった。
後ろにビッグベンが見えるから・・・・もしかしてここはロンドン？

僕に似た人が彼女を無理矢理引き留めている。

『嫌ぁ！離して！！ヤァ～！！』

『厄介なんだよオメーは！！』

『はぁ？』

『オメーは厄介な難事件なんだよ！余計な感情が入りまくって、たとえ俺がホームズでも解くのは無理だろうぜ！』

何、何だこのシーン！

恥ずかしいような感じがして・・・・

『好きな女の心を・・・正確に読み取るなんてことはな！！』

こ、告白？！

『え？』

『ラブは０（ゼロ）だと？笑わせ・・・・』

そこでいきなり映像が途切れる。

「あら・・・もう時間みたい。残りは自分で頑張ってね。」

天使が手を振ると、僕はどんどん何かに吸い込まれていく。

まるで、泥に吸い込まれていくように・・・・

「ん・・・」
気がつけば、元の病室にいた。
あれは、夢だったのか・・・・・

少しほっとした気もする。
でも、少し懐かしかった。
何だこの気持ち悪さ。
何かが自分の中で渦巻いている気がして・・・・・

「あ、新ちゃん起きたのね！びっくりしたわよ。６日間も眠りつつけていたから・・・」
え？

あれだけで６日間もたっていたのか。

「ってことは明日退院？！」

「そゆこと。」

つまり、この病院から出るということ。

少し、怖かった。

本来の自分を取り戻すことが。

天使が見せてくれた前の僕の記憶は、あまりにも信じられなかったから。

今の自分と違いすぎて。

どうせなら、記憶を失った新しい工藤新一として生きたい。

そして、第２の人生を歩んでいきたい。

何で自分がそんなことを望むのかもわからない。

でも、もう元の工藤新一には戻りたくない。

だから。

「ねぇ母さん、僕が事故で入院していること、ほかに誰か知ってる？」

「え？・・・もしかして、記憶を取り戻したの！？」

「違うけど・・・・・」

母さんはがっくりとうなだれる。

「私たち以外は知らないわ。でも、それがどうしたの？」

「ほかに誰にも知られないでロスに行きたいから。」

「なんで？」

「なんとなく・・・・」

言うわけにはいかなかった。

実の両親に記憶を取り戻したくないなんて・・・・・

「・・・わかったわ。だったら、もう寝といた方がいいわよ？明日

朝早いから。」
「わかった・・・」

寝ようとする僕のそばで、母さんは必死に荷物をまとめている。

そして、早く明日にならないかと願う。

早くこんなところから離れたいから・・・・

夕日が沈んでいく中、彼の気持ちも沈んでいった・・・・

5～記憶の欠片（後書き）

なんか新一のキャラが崩壊してます・・・

記憶をとり戻したくないなんて・・・・

それはさておき、最近冷えてきましたねー
やっぱり制服のスカートだと、めっちゃさむいです！
皆様も、体調には十分ご注意下さい。

それでは、これからもよろしくお願いします！

6～旅立ち（前書き）

今回も新一視点です！

6～旅立ち

ーーついにこの日が来た。

今日僕は退院し、ロサンゼルスへ向かう。

早朝に目を醒ました僕は、手続きを済ませた両親に車いすを押されて病院を出る。

「また日本とお別れね・・・・」
母さんが言った。
「そうだな・・・・・寂しくないかい？新一。」
父さんに聞かれた。
「ん・・・まあ。」

本当はちっとも寂しくなかった。

記憶が無い上に、取り戻したくないから。

だから、早く日本を離れたい。

それが本当の気持ちだった。

そして車に乗り込み、空港へと向かった・・・・

＃～～＃

「さあ、飛行機に乗りましょう！」
なぜか両親とともに搭乗口へ向かった僕たちは、誰も並んでいないのに乗ろうとしていた。
「あれ？誰も並んでないけど、もう乗るの？」
「だって私たちファーストクラスだもん！」

え？

えぇぇぇぇぇ！？

ふ、ファーストクラス！？

海外行きの飛行機となったらすごい値段なんじゃ・・・・・

「これくらい平気よ。さ、行きましょ！」

はあ・・・・

とりあえず僕たちは飛行機に乗り込んだ。

機体が猛スピードで走り出し、やがて浮上する。

そして僕はロスへと飛び立った。

もう過去を振り返らぬために。

6～旅立ち（後書き）

あとちょっとでようやくロスでの話に入ります。
なんかここまで引き延ばしすぎた気が・・・・

それはともかく、最近予約更新にお世話になってます。
結構便利ですよねー
今頃の私はテスト勉強してるんだろうな・・・・

とにかく、これからもよろしくお願いします！

7～退学届

次の日の早朝。

新一と蘭が属する3年B組の担任、石谷信昭は学校に向かっていた。

そして、門をくぐる。

すると、何かがポストに入っていた。

それをポストから引っ張り出し、封筒を開けてみる。

そこには見たくないモノが入っていた・・・・

中には一つの紙が入っていた。

広げてみるとーー

『

退学届

3年B組13番　工藤新一

』

「ーっ！？」

石屋は目を疑った。

それは昨日の夜有希子があらかじめ入れておいたモノだった。
でも、一週間も学校を休んでいた彼が突然転校だなんて。
そして彼は急いでこの紙を教員室へと持って行った・・・・

#～～#

3年B組の教室では。

「今日も新一来ないのかなぁ・・・・」
蘭はほおづえをつきながらため息をつく。
そんな中、担任の石谷が入ってきたためみんな一斉に席に着いた。
ざわざわとうるさい中、出席がとられる。

「・・・・工藤新一。」
石谷が新一の名を呼んだとき、誰かから質問が上がった。

「せんせー、今日も工藤は休みですかー？」
「えっ・・・・と・・・・」
彼は答えることができない。
蘭は胸騒ぎがした。
石谷は意を決したのか、退学届について話し出す。
「実は、こんなモノが今朝学校のポストに・・・・・」
そう言って退学届を広げる。

ークラス全員が息をのんだ。

「うそ・・・・・・」
最初に反応したのは蘭だった。
「そんなぁっ・・・・・」
クラス中が混乱する。

いきなり蘭が立った。

みんなそれにびっくりして反応する。

しかし、そんなの気にせずに蘭は教室を飛び出した。
「ちょっと・・・・蘭！」
それに続き、園子も教室を飛び出す。

そんな二人を、みんなは黙ってみているしかなかった・・・・

7～退学届（後書き）

はっきり言って、先生の名前は適当です（^＿^；

あと、今回は予約更新プラスすぐ投稿したことにより、２話一気に更新しました。

まさに今、親がいないのを隙にやっています。

こんなんでテストは大丈夫なのでしょうか・・・・

それはさておき、ようやく進んできました。

皆様の意見も取り入れたいので、感想よろしくお願いします！

とにかく、これからもよろしくお願いします（#^^）

8～そして彼は消えた

「はあ～・・・・」
蘭と園子は、ただただ工藤邸の前でため息をついていた。
学校を飛び出したときには青く澄み渡っていた空が、いつの間にか夕焼けの色に染まっている。

あれから二人は、あらゆる手段を使って新一の消息を調べようとした。

米花町や思い出のスポットはすべて探した。
新一と親しい人全員にも話を聞いた。
メールや電話もした。
警察にも探してほしいとお願いした。

なのに。

なのに・・・・・

いっこうに新一の行方はわからなかった。

おまけに新一の隣の家に住む阿笠博士にも聞いたが、「わからない」と言われてしまう。

ただ一つわかったのは、新一の消息を知る人は誰もいないということ。

・・・・そう。1年前のように。

そんな思いを抱き、新一から一度も連絡が来ないまま蘭は2年という長い年月を過ごしてしまう・・・・

ーー新一はそんなことなど知るよしもないのに。

8～そして彼は消えた（後書き）

はて、何で蘭はいきなり学校を飛び出して新一を探したのでしょう？
作者自身もわかりません・・・・

あと、更新が遅くなり申し訳ありません！
その上、もう一つの方の小説は思いっきり話の内容を変えました。
更新していないように見えますが、よければ見て下さい。

ちなみに、これからたまに活動報告をしようと思います。
お願いです。是非コメントを下さい！
なんだかコメントが来ないと寂しいので・・・・

こんな作者ですが、これからもよろしくお願いします#

9～新たな生活

その頃の新一は・・・・

ロスにようやくつき、現地にある家でくつろいでいるところだった。

沈黙の中、優作が話を切り出した。

「突然だが、新一おまえはここの大学に行く気はあるか？」

そう言って優作が見せたのは、ある大学の写真だ。

「グレーテン大学ですか・・・・ってもうとっくに大学受験のシーズン過ぎてますよ！」

「だから、新ちゃんは特別に試験さえ受かれば入れるのよ！」

「え？・・・・・えぇぇぇぇぇ！？」

あり得ないほどの特例だ。

しかも新一本人は記憶が無いため自分が馬鹿かどうかもわからない。

「とりあえず受けてみて！」

「はぁ・・・・」

そして新一は一週間後にテストを受け、さらにその一週間後、結果が帰ってきた。

結果は・・・・

ほぼ全教科満点！

そしてそのグレーテン大学で新一は新たな人生を歩み出す。

2年という年月をかけて・・・・

9～新たな生活（後書き）

やっぱり新一はすごいですよね！
すべて英語のテストをほぼ満点でクリアするなんて・・・
うらやましいです（＜＿＞）

１０〜二年後

そして、２年後・・・・・

蘭と園子は東都大学2年生となった。

新一とともに高校を卒業することもないまま。

・・・・あれから一切連絡が無いまま。

大学2年生になった蘭は、前に比べて笑わなくなり、いつも沈んでいた。

園子や周りの人がどんなに頑張ってその傷を埋めようとしても、駄目だった。

やはり、その傷を埋められるのは新一しかいない。

でも、その張本人は行方不明。

もう生きてないのではないかとさえ思っている人もいる。

そんな中、蘭と園子はロスへの1年間短期留学が決まった。

その一方、新一はそんなことも知らずにただ毎日を幸せに生きていた。

入った大学では、すぐにみんなと打ち解けた。

足が動かないという障害を乗り越えて。

みんなは車いすの新一をできる限りサポートしてくれる。

そんなみんなが記憶を失った新一の心の支えにもなっていた。

・・・・そんな二人が、再び心を通い合わせることはできるのだろうか・・・・

１０〜二年後（後書き）

なんか会話も一切無く、２年後の状況説明みたいになってます（^—^；

あと、最近感想が来なくて寂しいです・・・
誰でもいいので、感想を送って下さい！
お願いします。

11～思い出して

「・・・いよいよ蘭ちゃんも園子ちゃんもアメリカに行ってまうんやな・・・」
和葉がため息をつく。

ここは毛利探偵事務所の蘭の部屋。

蘭と園子は明日ロスへ旅立つことが決まっていたので、お別れをするために和葉が来てくれたのだ。

「・・・そうだね。私もここを離れたくないよ。」

しみじみと蘭が言う。

一同に沈黙が流れた。

「もしかして・・・・それって新一君が見つかってないから？」
蘭は核心を見抜かれたような顔をした。
「本当なんか？蘭ちゃん。」
「・・・うん。」
蘭の顔はますます沈んでいく。

あの日以来、蘭はどんどん元気をなくしていった。
得意だった空手もやめて、物静かになった。

そんな彼女を見ているのが園子には耐えられなかった。

「でもね、蘭、もう一度きちんとあの時の様子を思い出してみて？」
「・・・新一がいなくなったときのこと？」
「そう。だっておかしいと思わない？１週間も学校を休んだ後にいきなり退学届を出したなんて。」
真剣に園子は語る。
「つまり、その一週間の間はここにいて、その後に何らかの理由でここを離れたってこと。」
「・・・え？」
その時初めて蘭が反応した。

元々、園子が蘭にロスへ留学に行こうと言い出したのは、少しでも気を紛らわしてもらうためだ。

いつも彼のことを引きずっていてはいけないと。

「っちゅーことは、工藤君は今世界のどっかで暮らしてるってことなん！？」

「多分、そういうこと。」

「だったら、何で蘭ちゃんに知らせずに・・・」

「・・・それはわからない。でも、絶対あの大バカ推理之助は蘭の元に返ってくるから！！」

「・・・かもね。」

蘭は微笑を浮かべた。

でも、まさか彼女たちは思っていなかった。

留学先のロスで新一に会うとは。

蘭たちのことを忘れているとは。

そして、蘭は残酷な事実を知ることとなる・・・・

１１～思い出して（後書き）

はっきり言って私は関東生まれ・育ちなので関西弁がいまいちわかりません・・・・

もし訂正箇所などがありましたら、教えて下さい！

12～蘭の想い

ここはロスへと向かう飛行機の中。
機内では蘭と園子がしゃっべっている。

「・・・ねぇ蘭、今更だけど、本当に良かったの？」
「何が？」
蘭は何か分からないと装って答えた。
「だから、日本を離れたことよ。」
園子は察してほしいという風に話す。
「もしかして、また新一のこと？」
「え・・・・？」
園子は蘭からそんな言葉が出てきたことに驚いた。
「私ね、もう新一のことはあきらめる。だって2年も会ってないんだよ・・・・。」
蘭は悲しげな表情で答える。
「で、でも・・・」
園子が言おうとしたことが分かったのか、蘭は遮って話す。
「あのねっ、もう想いが薄れて来ちゃったのっ・・・！こんな中途半端に新一を好きでいたって・・・」
涙をこぼしながら蘭は続ける。
「しかも、大学ですごく熱心に告白してくる子がいるの。・・・もう、昨日オッケーしちゃった。」

わずかにほほえみながら彼女は言った。
「ほんとに、いいの？」
「うん！長谷泰志くんっていって、すごい頭がいいのにかわいいの。私を愛してくれそうだし。」
「・・・蘭がそれでいいなら私も応援するわ。いつでも、見方だから・・・」
「ありがと。」
そういう蘭は園子から見て心なしかうれしそうだった。
しかし、園子にはこんな風にしか見えなかった。

ーー蘭は違う人から愛されて新一君を忘れようとしている。ーー

でも、私には蘭を止める権利はない。

だから、もうどうしようもないかもしれない。

と園子は思った。

この先これがどんなことを引き起こすかも知らずに・・・・

１２～蘭の想い（後書き）

Ｈａｐｐｙ　Ｎｅｗ　Ｙｅａｒ！！

いよいよ２０１２年が始まりましたね。
実際、これは予約更新です。
今頃私は何をしているんだろう・・・

とにかく、皆様も良いお年を！

13～予知夢

蘭と園子がロスに留学してから早3週間。

だいぶ現地にも慣れ、普通に暮らせるようになった。

違う環境にいるせいか、蘭もいくらか笑顔を取り戻し明るくなった。

毎週泰志が来てくれるのもあるかもしれないが。

そんな中、蘭はある夢を見る・・・

＃〜〜＃

ここは電車の中。

週末に泰志と出かけた帰りだった。

疲れているせいか、そこで蘭は寝てしまうーー

ー＊†☆。。ー＊†☆。。

真っ白な空間に私は立っていた。

周りに何も無く、自分ともう一人の人が立っているだけ。

でも、そこにいる人の顔を見て息をのんだ。

・・・そこにいたのは新一だったから。

急いで私は新一に駆け寄った。

「新一！」

でも、私が近づこうとすると後ずさっていく。

「どうして逃げるの？！」

必死に叫んだ。

しかし、新一は逃げていく。

そして、冷静なまま彼が口を開いた。

「それは、おまえが俺の事を忘れようとしているから。」

私はびっくりした。

私の事を「おまえ」って呼ぶのを初めて聞いたから。

でも、何でそれを新一が知っているの？

そんな私の心を見透かしたのか、新一は続ける。

「知ってて悪いかよ。そんな情報ぐらいすぐ入ってくるんだよ！！」

目の前にいるのは豹変した私の知らない新一。

彼をそうしてしまったのは私。

そんな・・・・・・

「だからもう・・・・」

「ごめんなさい！」

私は新一を遮るように叫んだ。

「ずっと新一が帰ってこなかったから、寂しかったの！だから、帰ってきて・・・・」

「え・・・・・？」

ようやく新一が後ずさるのをやめた。

なのに、なのにぃ・・・・・・！

ー＊†☆。。ー＊†☆。。

そこで蘭ははっと目が覚めた。

気がついたら、目から一筋の涙が・・・・

「どうしたんだ？」

心配して泰志は声をかけてくれる。

「ううん、何でも無い。」

蘭は笑顔でこたえた。

でも、今蘭にとって泰志の優しさは痛かった。

まだ、新一の事が好きだから・・・・

そして、その想いが思いもよらぬ事を引き起こすーー！

１３～予知夢（後書き）

だいぶ進んできましたねー！（＾＾）！

そして、大変うれしいお知らせが！！
なんと、最高週間アクセスが５２０を超えました！
しかも、総合アクセス数は１３０００を超えました！

ありがとうございます！！！！
そして、これからもよろしくお願いします！

１４～見つけたあの人（前書き）

すみません！
前回うれしさのあまり書き忘れました。
泰志が蘭と週一で会えるのは、彼も蘭と１０キロほど離れたところにある大学に留学しているからです。

もちろん、蘭のために。

１４～見つけたあの人

その翌日。

蘭は大学の講義を終え、園子とともに家へと帰ろうとしていた。

「今日も大変だったわねー。」

園子が伸びをしながら言う。

「そうだね・・・・」

蘭は笑顔で応える。

でも、いくらかその笑顔は引きつっていた。

「・・・ねぇ蘭、何かあったの？」

その表情を読み取ったのか、園子は問いかけた。

「ん？何が？」

「なんか長谷君と会ったばっかりなのに、嬉しくなさそうだから。」

「そう？」

少し見抜かれていた部分もあったから、蘭は動揺を隠すように言う。

「まあ、何もないならいいんだけど・・・・」

そこで会話は途切れ、二人とも黙ってしまった。

そして、二人は人通りの多い交差点を通過する。

「うわっ、やっぱすごい人！」

園子は周りに押されながら言った。

「だね・・・・」

蘭も流されないように進んでいる。

ふと、蘭は目を疑った。

自分の知る人が目の前に見えたから。

「蘭、どうしたの？」

急に立ち止まったため、園子が声をかけた。
「っ！何でもない。忘れ物を思い出したから、先帰っててて！」
「え、ちょっ・・・・そっちは大学じゃないわよ！」

園子がそう叫んだときには、蘭はもうすでにいなかった。

そして、蘭は無我夢中でその人を追いかけた。

１４～見つけたあの人（後書き）

もうすぐで、あの人とあの人の再会です。
お楽しみに！

１５～たどり着いた家

そして、蘭は車いすに乗った彼につられるようにして人通りの少ない道路に出た。

必死に走って、ついに蘭は彼に追いつく。

「新一！！」

蘭は彼の肩に手をかけて言った。

少し、蘭は期待していた。

また彼が自分の名前を呼んでくれる事を。

でも、彼が発した言葉は蘭にとって思いもよらぬものだった。

「ーーＷｈｏ　ａｒｅ　ｙｏｕ（あなたは誰）？」

一瞬思考が止まった。

しかし、このままではいけない。

そう思った蘭は、とっさに

「Ｏｈ，　ｓｏｒｒｙ．Ｉ　ｍｉｓｔａｋｅ　ａ　ｐｅｒｓｏｎ　ｆｏｒ　ｓｏｍｅｏｎｅ　ｅｌｓｅ．（ごめんなさい。人違いです。）」

と言ってしまった。

ーーしまった。

こう思ったときにはすでに遅かった。

蘭が固まっている間に、彼は納得したのかまた車いすを動かし進み出してしまった。

でも、そのすぐ後、蘭は見たくもない光景を目にしてしまう。

新一の車いすを押しているのは一人の女の子。

新一もさっきとはうって変わって明るい表情を見せている。

何で他の女の子と嬉しそうに話してるの？

そもそも何で車いすなんかに乗ってるの？

何で私の事憶えてないの？

何で、何で・・・・・・！

蘭の頭にはたくさんの疑問が浮かんだ。

だからか。

蘭は本能的に二人が入った家の前に来てしまった。

表札には、『工藤』と書かれている。

そして、震える手で扉をならした。

コンコン

「はーい。」

ガチャ

「えっ・・・・・もしかして、蘭ちゃん・・・・？」

そう。

出てきたのは新一の母である有希子だったのだ。

お互い固まってしまい、気まずい雰囲気になる。

しかし、最初に沈黙を破ったのは有希子だった。

「・・・・・とりあえず、入って？」

そうして蘭はおずおずと工藤家に入っていった・・・・

15～たどり着いた家（後書き）

蘭は相当ショックだったでしょうねー
って自分がやったんじゃん！！

まあ、それはさておきそろそろ次の小説のリクエストをいただきたいと思います！
私はストーリーを考えるのに時間がかかるので（^＿^；
是非ともよろしくお願いします！

１６～知ってしまった残酷な事実

ここは、工藤家の応接室。

机を挟んで向かい合わせに蘭と有希子がソファーに座っている。

気まずい雰囲気の中、有希子が口を開いた。

「・・・どうしてここがわかったの？」

まず一番の疑問をぶつけた。

「実は私、１年間の短期留学に１ヶ月前から園子と一緒に来ているんです。」

蘭は気まずそうにこたえる。

「どこの大学なの？」

「エーゲン大学です。」

エーゲン大学と言えば新一の通うグレーテン大学のすぐ隣だ。

「・・・それで、新一を町中で見かけてここにたどり着いたって事ね。」

「そういうことです。」

また変な沈黙が続いた。

でも、今度はその沈黙を破ったのは蘭だった。

「・・・どうして新一はここにいるんですか？」

一瞬有希子はたじろいだ。

まさかいきなりそれを聞かれたから。

でも、知られてしまった以上はしょうがない。

そう思ったのか、有希子はすべてを話し出した。

「あのね・・・・・」

新一が事件の帰りに事故に遭った事。

その時偶然有希子と優作が日本にいた事。

事故によって新一が記憶を失ってしまった事。

さらに後遺症として足が動かなくなり、今は車いすに乗っている事。

心配だったため1週間で退院し、ロスに連れてきた事。

本当に、すべてを話した。

蘭を傷つける事もあるのに。

でも、１回しゃべり出したら止まらなかった。

早く楽になりたかったからかもしれない。

そんな残酷な事実を、蘭はただ黙って聞いていた。

「・・・そういうことだったんですか。」

蘭は青い顔で言った。

必死に涙を隠しているのが分かった。

「ごめんなさい、今まで黙っていて。でもね、誰にも黙ってきたのは新一が望んだからなのよ。」

「え・・・・？」

次の一言を蘭が言おうとした。

でも、それは今一番聞きたくない人の声で遮られた。

「母さーん、誰かお客さんが来てるのか？」

そう。

新一の声だった。

その声が聞こえたと同時に、ドアが開いた。

ーーそこには、前とちっとも変わらない彼がいた。

変わっていると言えば、車いすに乗っているくらい。

でも、中身は全く蘭の知らない人。

しかも隣には知らない女の子が・・・・

「あ、すいません！初めまして。僕工藤新一と申します。そこにいるのが母さんです。」

礼儀正しくされた事に、蘭は少し戸惑った。

「は、はじめまして・・・・・」

こういうしかなかった。

「あなたのお名前は？」

「毛利蘭です・・・・」

新一と話していると、蘭はどんどん心の痛みが増していった。

でも、今逃げる事はできない・・・・

彼女の事を聞かなければいけないから。

「あの、隣の方は？」

「あぁ、この人は榎実梨（Ｅｍｉｌｙ）・弘瀬・Ｌａｓｓっていいます。日本とアメリカのハーフで、えーっと・・・・一応僕の彼女です。」

彼はほおを赤らめながら言った。

ついに、蘭はその場にいられなくなった。

「あの、すみません。今日は用事があるのでここで失礼します。」
蘭は無理矢理席を立ち、ドアに向かっていった。
「ちょっ・・・蘭ちゃん待って!!」
有希子の声が聞こえた。
でも、もう後ろを振り返りたくなかった。
あの2人を見たくなかったから。
「・・・お邪魔しました。」
蘭は消えそうな声でそう言い、工藤家を出て行った。

そして、蘭は自分の家へと全速力で走った。

でなければどんどん涙があふれてきそうだから。

そんな想いを振り切るように、蘭はかけていった・・・・

16～知ってしまった残酷な事実（後書き）

実はあの女、新一の彼女でした・・・・
作者「蘭、あきらめちゃ駄目！！絶対頑張ればハッピーエンドがやってくるから！」
蘭「本当にぃ～？」
ギロリ
作者「こわっ・・・た、たぶん・・・・・」
新一「蘭をこんな目に遭わせてやがって・・・・・（怒）」
作者「ぎゃあ～！そ、そんなにおこんないで！」
蘭「これで私と新一が結ばれなかったら・・・・」
蘭&新一「ぶっ殺す！！」
作者「や、やめて～ｖ（≧□≦）ｖ」

っと言うわけで、はたして新一と蘭はお互い恋人がいる中で、結ばれるのでしょうか？
これからもおたのしみに～ゞ（＊，－、＊）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5559x/

君を探して

2012年1月6日10時47分発行